

# ぎたへらすだより



## ■第 49 回ギター音楽大賞 (ギター寄贈に至るまで)

先日 2025 年 4 月 27 日に第 49 回ギター音楽大賞が大阪で開催されました。私は予定が合わず、2 日目の「大学生・ジュニア・大賞部門」のみ伺いました。会場は「門真市民文化会館ルミエール小ホール」。客席は約 250 席、現代のクラシックギターにおける音量を考慮するとベストな広さだと感じます。生音での演奏は、楽器の響きの強弱やサスティーン（音の余韻伝達範囲）やレスポンス（弦を弾いた時の音の跳ね返り度合いや立ち上がり）が十分に感じられ、これらの楽器から聞こえる音は奏者の指のタッチやテクニック、そして楽器そのものの作りが入り混じって完成されて聞こえるわけですが、その聞こえてくるニュアンスは演奏場所によっても大きく変わり、それらの場所選びも重要な一面を持っていると思っております。

### ～寄贈するにあたり～

振り返れば、今回の「学生最優秀賞」へギターを寄贈するにあたり、コンクールで使われている楽器の多くは銘器もあり、私の楽器を寄贈し喜んでもらえるのか葛藤がありました。しかし、私がギター演奏の師（大沢一仁先生）から教わったことは「若きギタリスト達への育成の手助け」です。ギター製作家が為せることは何なのか・・・

初心に戻り、考えました。製作も演奏もはじめはベーシックから始め、徐々に良いものへと段階を踏んでいく。私が見習いの時代は切れない工具を持たされて、何度も研いで削って腕をあげる。そのうちに、「少し良い刃物を持つとうとする気持ち」と「扱いてなせる自信」が湧いてきました。演奏家も、「もしかしたら、そうではないのか？」と。しかしながら、オーダーメイドの楽器となれば金額だけにそう簡単には手は出せないし、受賞者が若ければ若いほど、演奏技術や音楽を学ぶのにお金も掛かり、手に取るチャンスが少なくなります。

もしコンクールで入賞し「オーダーメイドの楽器が寄贈されたら！！！」このような考えに至ったのが始まりでした。

### ～とんとん拍子に～

そのころ、私の楽器を気に入ってくださり演奏に度々使用していた猪居謙先生と会うチャンスがあり、懇願をしました「是非とも学生部門へ寄贈したい」と。「ギター音楽大賞」の審査員でもある先生は即答で「あえて学生部門か。おもしろいやん！」すぐさまコンクールを主催されている「日本ギタリスト会議」へ話を持っていってくださいました。お人柄ですね、本当にありがたいことです。そこからは、会長である猪居信之先生から快く承諾のお返事をいただき、実現に至ったのでした。

### ～見守りたい学生たちへ～

コンクール当日、どのようなギタリスト達がでてくるのか非常に楽しみでした。まさか、このようなレベルだとは思いません。来場者の方々からは「喜色満面」がうかがえるくらいに甲乙つけがたい演奏が競い合っていたのです。その姿も学生ならであり、大人用サイズのギターで D. スカルラッティを弾かれた小学生、綺麗なトレモロを奏でる大学生、大賞部門入賞の姉と揃って入賞した高校生の妹。すべてにドラマがありました。

そして、その中で「学生最優秀賞」に輝き私のオーダーメイド目録を手にしたのが高校生の方。バリオスを奏でるそのテクニックと音楽は、印象深く、これからさらに楽しみな若き才能がこのコンクールから誕生したのだと確信しました。

これこそ、私が志している「若きギタリスト達への育成の手助け」に近づけたのではないかと思います。

今一度、私の思いを受け入れてくださった「日本ギタリスト会議」の皆様にお礼を申し上げたくおもいます。ありがとうございました！

そして若きギタリスト達に希望がもてるよう続けて応援したいものです。

